

られている。勿論、研究の進捗度は属によって異なり、トンガリハダカ属 *Lampanyctus* では 11 タイプ、ハダカイワシ属 *Diaphus* では 22 タイプの A・B2 群への大別で終わっているが、後者については北西太平洋産 25 種のうち 22 タイプが識別されていることは高く評価されてよい。この多様性の高い分類群の稚魚分類学はこれによってほぼ基礎が築かれたと考えられるからである。本篇の文末に注意深い観察によって明らかになった新知見がまとめられていて興味深い。例えば、ソコハダカとイサリビハダカでは大西洋産の個体と形態の相違が認められること、従来、ススキハダカ属 *Myctophum* の種で報告されていた幼期の胸鰭条にみられる過剰鰭条 *supranumerary rays* は、成魚において発光器 (2nd pvo) とその支持表皮によって下部鰭条の一部 (2-6 条) がおおわれてしまうことに起因することなど、いずれも貴重な発見である。

全篇を通じて誤りはほとんどみられない。図版も鮮明であるがダルマガレイ科の図版 22, 23 のカラー印刷にやや難点があるのが惜まれる。また一部の仔稚魚の図に多少簡略化しすぎた印象を受けるものがある。図版が記載の不足を補足する情報源でもあるという立場をとれば、この辺の配慮は見逃すことは出来ないことであろう。

いずれにせよ、本書によって外洋性魚類プランクトン研究への足がかりが与えられたことの意義を改めて強調し、今後の研究の発展を期待したい。

(沖山宗雄 Muneo Okiyama)

以上のほかにも、最近次のようなものが出版されていますので、書名のみをあげておきます。これらについての紹介記事の投稿を歓迎します。

- Cailliet, G.M., M. Love and A.W. Ebeling. 1986. Fishes. A field and laboratory manual on their structure, identification and natural history. Wadsworth Publ. Co., California, viii+194 pp., figs. 1.1-16.4.
- Dawson, C.E. 1985. Indo-Pacific pipefishes (Red Sea to the Americas). Gulf Coast Research Laboratory, Mississippi, 230 pp., 293 figs.
- Dor, M. 1984. Checklist of the fishes of the Red Sea (CLOFRES). Israel Academy of Sciences and Humanities, xxii+437 pp., 1 map.
- Lowe-McConnell, R.H. 1987. Ecological studies in tropical fish communities. Cambridge Univ. Press, xii+382 pp., figs. 1.1-14.4.
- Polovina, J.J. and S. Ralston, eds. 1987. Tropical snappers and groupers. Biology and fisheries management. Westview Press, London, ix+659 pp., pls. 1.1-1.3., figs. 2.1-14.5.
- 沈 世傑. 1984. 台湾魚類検索. 台北南天書局, ix+533 pp.
- Smith, M.M. and P.C. Heemstra, eds. 1896. Smiths' sea fishes. Springer-Verlag, xx+1047 pp., figs. 1-6+1.1-270.3, col. pls. 1-144.
- Summerfelt, R.C., ed. 1987. Age and growth of fish. Iowa State Univ. Press, xv+544 pp.
- Whitehead, P.J.P., M.-L. Bauchot, J.-C. Hureau, J. Nielsen and E. Tortonese, eds. 1986. Fishes of the north-eastern Atlantic and Mediterranean. Vol. III. UNESCO, Paris, pp. 1015-1473.

## 会 員 通 信・News and comments

### Conference on Indo-Pacific Fishes

The Third International Conference on Indo-Pacific Fishes will be hosted in Wellington, New Zealand, on 27 November-1 December, 1989. The first circular will be distributed in late 1987. For further information write to Graham S. Hardy, National Museum of New Zealand, Private Bag, Wellington, New Zealand.

### エンリコ・トルトネーゼ博士のご逝去を悼む Obituary of Dr. Enrico Tortonese, 1911-1987

1987年5月18日(月)午後1時ジュネボの Museo Civico di Storia Naturale (Giacomo Doria) に、かねて連絡しておいた通り、Dr. Gianna Arbocco (魚類部

主任)を訪ねた。あまり時間がなかったので、すぐさま標本庫に案内していただき、調べたい標本を与えられた実験机へ運び、スケッチや測定にかかった。2時間ほどしてお茶の時間になり、コーヒーを飲みながら「以前ここにおられた Dr. Tortonese はお元気ですか」と聞いたところ、Dr. Arbocco は一瞬口ごもられ、ついて「最近あまりこちらへは来られませんでした。実は3週間程前に亡くなりました」と続けられた。それからいろいろ博士のことをうかがっているうちに、Dr. Tortonese とは面識はなかったが、永年別刷交換をしていたので、なんだか生前お目にかかっていたような気がして来た。イタリアのこの著名な魚類学者のことを「日本魚類学会の会員に知らせたいなら、私達は追悼文集を出版するつもりで、それができるのは丁度あなたが日本

に帰国した後になるので、送りましょう」と Dr. Arbocco は言って下さった。

そして先週(8月中旬)その追悼文集が届いたので、簡単に Dr. Tortonese を偲んで業績を紹介することとしたい。博士は 1911 年 3 月 10 日にトリノで生まれ、トリノ大学で動物学を修められた後、1955 年までトリノ大学動物学博物館の教授を勤められた。1955 年に Museo Civico di Storia Naturale (G. Doria) に転ぜられ、1976 年まで魚類部主任として魚類学および海洋生物学の研究に専念され、イタリアの魚類学会および海洋生物学界の重鎮として活躍された。博物館を退官されたから、執筆活動は旺盛で、多くの論文や本を出版されたが、1987 年に入ってから体調がすぐれず、ついに 4 月 25 日にジェノバで亡くなられた。

博士の業績を辿ると、魚類学の論文としては、Intorno al *Cephalopholis hemistictus* (Rupp.), Boll. Mus. Zool. Anat. Comp. Torino, 43 (35): 205-209, 1933 に始まり、Fishes of the north-eastern Atlantic and the Mediterranean (FNAM). Vols. I-III. UNESCO, Paris, 1984-86 (as one of editors and authors) に至る 213 篇を数える。その他に棘皮動物に関する論文 93 篇、海洋生物学関係その他の論文 62 篇がある。魚類学および海洋生物学に関する本としては *Gli animali superiori*, SEI, Torino, 1949 に始まり、*Pesci del Mediterraneo, recenti studi intorno alla sistematica e distribuzione*, Ed. Il Ventaglio, Roma, 1986 に至る 19 冊がある。

博士の研究の集大成とも言える *Leptocardia, Cyclostomata, Selachii* (Fauna d'Italia, II, 1956), *Echinodermata* (Fauna d'Italia, VI, 1965), *Osteichthyes* (Pesci ossei), Parte I (Fauna d'Italia, X, 1970), *Osteichthyes* (Pesci ossei), Parte II (Fauna d'Italia, XI, 1975), Calderini, Bologna. はあまりにも有名である。また博士は CLOFNAM や FNAM の著者および編者の一人として出版に尽力され、European Ichthyological Congress の組織委員としても活躍された。拙筆するに当り Dr. Tortonese の御冥福を切に祈りたい。

(中村 泉 Izumi Nakamura)

**フランス魚類学会 1987 年度年次総会に出席して**  
**At the "Société Française d'Ichthyologie**  
**Assemblée Générale du 6 Février 1987"**

1987 年 2 月 6 日に、客員研究員として滞在していたパリのフランス国立自然史博物館魚類部で、1987 年度フランス魚類学会年次総会が開催され、出席する機会を

得たので簡単にその模様を報告する。

午前 9 時半から開かれた年次総会には約 50 人の会員が参加して、まず会長(任期は 1 年で 1 年のみの重任が認められ、現在の会長はリヨンカトリック大学の Prof. Joseph Goubier である)その他の役員選出が行われた。それに続いて午前 11 時から下記の研究発表が、今年度は "Perspective de développement de l'Ichthyologie continentale" の題のもとで行われた(一題の持時間は質疑応答を入れて 45 分間):

- La "Loi Pêche" et l'ichthyologie. M. Poupeloz et M<sup>lle</sup> Maniglier (環境省).
- Less passes à poissons. M. Larinier (国立農業機構, 水・森林資源工学研究所).
- Developpement de l'aquaculture au Ministère de l'Agriculture. M. G. Benoit (農業者).
- L'aquaculture dans la Région Centre. M. J. F. Martin (中央淡水水管理局).
- Rôle, mission et action du Conseil Supérieur de la Pêche. M. Holl (上級漁業理事会).
- Biologie de la truite de Mer en Basse Normandie Reconquête de l'Orne. M. C. Richard (レンヌ地区上級漁業理事会).
- Action dans le cadre du programme PIREN Resources ichthyologiques (Centre national de la recherche scientifique). M. D. Gerdeaux (国立農業研究所).

今年度の題にもよるが、上掲のごとく魚類学的講演より水産学的なものの方が多いたことがまず目についた。昼食に 1 時間半をとり、その間に評議員会や CYBIUM (Bulletin de la Société Française d'Ichthyologie) の編集委員会をやってしまうというのは日本魚類学会と同様であった。

フランス魚類学会の事務局は国立自然史博物館魚類部にあり、現在の会員数は約 400 人で、そのうちに約 150 人の外国人会員を含んでいる。この会員数は日本魚類学会のほぼ 1970 年代始めの会員数に匹敵し、これからの発展が望まれるが、なかなか会員数は増加しないとのことであった。今回の講演や CYBIUM 掲載論文からもうかがえるように、フランス魚類学会にはいわゆる純粋魚類学者の比率が少く、"水産魚類学会"の感がしなくもない。これは 3 年毎に開かれる European Ichthyological Congress (来年はブダペスト、その次はリスボンかマドリッドで開催の予定)でも事情は似ていて、EIC (事務局はパリの国立自然史博物館魚類部)はなんだか SFI の拡大会社の感があるとのことヨーロッパの研究

者の誰かに以前聞いたことがある。夕方6時頃には全ての子定は終了し、親睦会など一切なしに、全日程を1日で終えてしまった。人々は例年になく寒さの厳しかったベリの街へ三々五々消えて行った。

(中村 泉 Izumi Nakamura)

**海水槽の管理に関する国際セミナー(タイ)出席の記  
International Seminar on Marine Aquarium  
Management (Thailand) (14-16 September, 1987)**

多分、日本全国の公私立水族館をはじめ、国立大学臨海実験所などへは、すべて標題のセミナーの案内が届いたと思われる。しかし、タイ王妃や UNESCO その他のものものしいほどのスポンサーがついているにもかかわらず、このセミナーへの諸外国出席者は至極限られ、何とも小じんまりしたものになってしまった。私は、新潟市立水族館の新築に関係していることもあって、少しは諸外国の事情を勉強してきょうかと多忙について参加しただけに少々残念であった。世界で初めての試みと自負していた主催者代表トビー博士(Twee Hormchong)にとって、全く期待はずれだったのでないかと、いささか同情しているところである。

開催地は、バンコクの東方約 150 km 離れたチョンブリ市のバンダサエンにあるスリナカリンヴィロット大学海洋研究所(俗に Bangsaen 海洋研究所)で、同大学動物博物館と共に文部省教員養成局の後援を得て 1969 年 9 月に建設され、12 月より一般公開された。Srinakharinwirot 大学は、バンコクにあるタイでは最も古い(1917 年創立)チュラロンコーン(Chularonkhorn)大学に次ぐ規模の大きい国立大学で、8 キャンパスに分れているという。1980 年 7 月に大学当局は日本政府に協力を要請し、これに応じて JICA(日本国際協力事業団)が 230,000,000 バーツ(約 14 億円)の建設費を援助して、新たに海洋研究センターが建設された。これにより、1983 年 3 月に 16 の研究室をもつ研究所に併設されて、海洋科学博物館と海水水族館が完成したのである。

1984 年 7 月末にはプミポン・アデューンヤデート国王の臨席を仰ぎ、開所・開館式が行われた。水族館の入館料は成人 10 バーツ(60 円余)、子供は半額だから格安である。水槽壁はアクリル製で、43 個の水槽のうち、最大は 200 t、最小は 0.5 t という。

今回の外国の参加者は、水族館管理と自然保護について深い見識をもつオーストラリア海洋研究所長 J. T. Baker 博士、名古屋大学菅島臨海実験所所長佐藤英美教授、夫人の松陰女子大学佐藤雪子助教授、新潟大学佐渡臨海実験所所長本間義治教授、長崎大学水産学部平山和

次教授、東京大学海洋研究所多賀信夫名誉教授(JICA 計画で、2年間タイに滞在予定)、ヒリッピン大学海洋研究所 M. J. A. Trinidad-Roa 夫人、シンガポール Aquafauna Biosystems の J. Hsu 博士と T. S. Nang 氏の方々であった。タイ側は、前記トビー博士、チュラロンコーン大学海洋科学教室の Piamsak Menasveda 博士、Twesukdi Piyakarnchana 博士、Surapol Sudara 博士(名門出身で、自然保護問題で活躍)などが主で、外に獣医学教室の Jirasakdi Tangtrongpirot 博士、Kaseatsart 大学水産学部の Supap Mongkolprasit 博士など、52 名ほど出席された。スバブ夫人は、ミンガン大学留学中に上野輝弥博士と一緒にだったという魚類分類学者で、会場でタイ産軟骨魚類に関する大冊の論文を頂戴した。

セミナーの第 1 日目(9 月 14 日、月曜)は、9 時半にタイ王室第 3 王女チュラブホーン(Chulabhorn)妃殿下の御臨席を仰ぎ、スリナカリンヴィロット大学学長のお迎えの辞、同妃の本国際セミナー開催に対するお祝辞と続いた。セッション I は、化学者である同妃が、去る 8 月下旬ソウルで催された太平洋学術会議で御報告されたのと同題の“タイ国の発展における科学と技術の役割”について、多数のスライドを御使用のうえ、30 分御講演された。招待状には正装で出席せよと記してあったが、大学側の制服には一驚した。かつての台北帝大のそれを思わせるもので、旧海軍や旧警察の夏服(白色)と軍帽といったら分って頂けようか。女子職員もコバルト色の軍装であった。それより、カーキ色の軍服の軍人による警備の物々しさと、送迎の華やかさの方には、たいへん驚かされた。

プログラムは、別記した通りで、セッション II の Baker 博士の基調講演に始まり、平山教授による新築された須磨水族館の紹介など次々と発表が行われた。

第 2 日目の佐藤教授のものが、初めての科学的な発表といえる。私も負けじと寄生性橈脚類の組織像について、カラーズライド 40 枚を用い話した。東南アジア諸国では、魚族の細胞組織学が立ち遅れているのを経験しているが、水準を高めることは容易でないようである。スバブ博士によるタイの水族館展示用魚類の発表とスライドよりも、むしろ第 3 日目に行われたアンダマン海の珊瑚礁魚類のスライドは見事であった。しかし、これら熱帯の魚族を採捕するために、青酸ソーダを使用しているので、コラルをはじめとする自然破壊がひどく、この事実を示す一連のスライドには心が痛んだ。購入業者の多いシンガポールと日本の名を出して環境保全を訴えていたが、説得力が強く気恥ずかしさすら覚えた次第であ

る。私は、座長のほかに、専門外なのに魚病のパネラーとしても壇に立たされた。当日のタイ側の発表で注目されたのは、トビー博士によるクダタク(オオウミウマ)の室内繁殖に関するものであった。マングサエン海洋研究所の目玉業績とも思われ、水族館のみならず、漢方薬として需要が高いとのことで興味を惹かれた。

私は翌 17 日に、佐渡でマリノバージョンに関する会議があり、会長としての職責を果たさねばならないので、最終日(16日)の午後のセッションは欠席して空港へ向かった次第である。ところで、先述したように、マングサエン海洋研究所には 16 の研究室があり、外にも立派な事務室、会議室、所長室などを備えている(No. 1. 海洋学, 2. 化学, 3. 生化学, 4. 生理学, 5. 微生物学, 6. 7. 分類学, 8. 電顕室, 9. 病理学, 10. 11. 生態学, 12. 植物プランクトン, 13. 動物プランクトン, 14. 15. 水族飼育室, 16. 器械室)。どの部屋の器械もほとんどが大和光機製で、その他ニコンの顕微鏡や投影装置、日立の電顕、柳本のガスタロなどが目につき、いずれも JICA の援助によるものである。しかし、まだ作動していない測定器具も目立ち、研究面でもいっそうの協力を行うことが必要ではないかと強く感じさせられた。

タイへは、日本から相当数の水産魚類関係の指導・協力者が出向している。タイ国より叙勲の榮に浴した藤谷超東海区水産研究所所長は別格として、最も名を耳にしたのは東京水産大学の多紀保彦教授であった。タイは歴史的にみて一度も外国の侵略を受けたり植民地化することが無く、戦争に負けたことのない、いわば強い立憲君主国である。敬虔な仏教徒で、一見穏やかそうな中に、実は心が強く勇猛果敢さを秘めた農民を主としている。会場の秘書嬢たちも要領が良く、ことにエコロジー専攻の Saowapa Sawatpeera 嬢には空港の出迎え以来、何かと世話になり感謝している。しかし、比較的高緯度の新潟から赴いた私にとって、暑いことと、直接水道の水が飲めないのには閉口した次第である。

**Programme of "The International Seminar of Marine Aquarium Management"**

September 14, 1987

Session

Roles of science and technology in national development.

Her Royal Highness Princess Chulabhorn

Session II

Role of marine aquarium in education and research.

J. T. Baker

Session III

Marine aquarium in Thailand.

Twee Hormchong

Marine aquarium in Singapore.

H. Tang

Session IV

Marine aquarium in Japan.

K. Hirayama

September 15

Session V

What do we expect from public aquarium?

Surapol Sudara

Marine aquarium in Australia.

J. T. Baker

Marine aquarium in Philippines.

M. J. Trinidad-Roa

Session VI

Panel discussion—Marine aquarium management: research and maintenance.

H. Sato; J.K.Z. Hsu; Twesukdi Piyakarnchana

Session VII

Control of water quality in closed circulating system of an aquarium.

K. Hirayama

Rearing of young sea urchins from larval stage in laboratory.

H. Sato

Maintenance and care of giant clams (*Bivalvia*: *Tridacnidae*).

M. J. Trinidad-Roa

Session VIII

Marine aquarium fishes of Thailand.

Supap Mongkolprasit

Diseases and parasites of marine animals in Thailand.

Jirasakdi Tangtrongpirot

Histology of copepods, parasites of aquarium fishes.

Y. Honma

September 16

Session IX

Design and implementation of marine aquarium for homes and commercial complexes.

J. K. Z. Hsu

An improved method for packing of marine fishes during transportation.

J. K. Z. Hsu

Session X

Marine aquarium business in Thailand and effect on natural conservation.

Supakorn Patanavibark

Session XI

Panel discussion—Diseases and parasites of marine